

怪談物件マヨイガ

蒼月海里

第三回

わたつみ こんせき
海神の痕跡

その運河には、長い間、よどみがあった。

時に海を漂い、時に彼方へ向かって泳いでいた大いなる存在が、人の手によって繋ぎ止められていたからである。

その存在がいるから運河が濁り、そこに住まう人々の心もまた蝕まれていった。

そして、周囲の生態系も――。

豊洲にあるマンションの一室から、毎晩のように物音がするといふ苦情が寄せられた。

豊洲は、東京都江東区の臨海都市だ。りんかい線のゆりかもめが通り、東京湾の潮風が運河を伝って流れ込む場所である。

高層マンションも多く、物件が密集する地域でもある。当然、マヨイガが扱っている物件も多かった。

「夜に足音と思しき音が響いている、かあ。生活音って難しいんですよね」

パソコンに記録した苦情を眺めながら、榊は溜息を吐いた。

「何号室だ？」と上司の柏崎が問う。

「三〇二号室の入居者さんからの苦情です。足音だから、上ですかね」

榊の報告を聞いた柏崎は、キーボードに走らせていた指をびたりと止めた。

「その件なら、生活音じゃないかもしれないな」

「えっ。住民以外に、異音を発するような何かが？」

「ああ。周りの家からも何件か苦情が来ていて、全室のポストに騒音苦情に関する手紙を入れていたんだ。三〇二号室の入居者からは何の報告もなかったから、てっきり、その部屋からしていると思うたんだが」

柏崎は眉間を揉みながら、榊と向き合う。

「騒音を立ててる人は、騒音の苦情なんて寄こしませんよね……」

「ああ、そうだな。これで、三〇一、三〇二、三〇三、四〇一、四

〇三と似たような苦情が来たわけだが」

「それってもう、四〇二号室が怪しいのでは……」

榊はすかさずにそういうものの、柏崎は言いあぐねるように口を噤んでから、こう返した。

「四〇二号室は、空き室なんだ」

さあっと榊の血の気が引く。

「こ、九重ここのへさん案件では……!?!?」

「建物の構造上、思いもよらないところから響いている可能性もあるが……。まあ、うちの会社が扱っている物件だしな」

先日も、呪術屋じゆじゆつやである九重の力を借りたばかりだ。

貸店舗の入居者が変死していて、消失したご遺体を何とか取り戻したのだが、その時に異界という異様な空間に迷い込んで恐ろしい想いをした。

「やっぱり、呪い——ですかね」

「可能性の一つとして考えられるな。深夜の騒音トラブルは住民の健康を損ねることもあるから、早めに手を打ちたい。業者への発注を頼む」

「あつ、ハイ!」

榊は九重に連絡すべく、彼の名刺を探し出す。まさか、この短期間で怪現象に何度も見舞われるとは。

（それにしても、柏崎さん的には、怪現象というよりも騒音トラブルなんだな……）

水回りのトラブルで水道修理業者に、虫が湧いたという苦情で害虫駆除サービスに連絡するとうのと変わりがない様子だった。

怪現象をむやみに否定するよりはいいが、もう少し訝いぶしむリアクションがあつてもいい気がすると榊は思った。

「それにしても、豊洲か。一年前の事件を思い出すよ」

パソコンに向き直りながら、柏崎がぼつりと言った。彼女の整った横顔は、苦々しげに歪められている。

「綿津岬消失事件……ですか？」

「ああ。うちの会社も、あの町の物件を幾つか管理していたからな。処理に追われる日々だった」

約一年前、豊洲に隣接した町が、丸ごと運河の中に没した。

綿津岬という埋め立て地の上に築かれた街であったが、埋め立て工事の際に不手際があったとかで、地震とともに大規模な地盤沈下を起こし、最終的には崩壊してしまったのだ。

前代未聞の重大事件となり、事件は連日のように報道されて、様々な憶測が飛び交った。

「あの時は、オカルトな考察をする輩が多くてな。話によると、綿津岬が運河に沈む時に、巨大な異形の怪物が現れたそうだ」

「怪物映画みたいですね……。動画とか、なかったんですか？」

「どういうわけか、動画も画像もない。撮るのを忘れて見入っていたとか、撮ったけれどもデータが破損していたとか、そんな話ばかりだ」

「胡散臭いことこの上ないですね。何人ぐらいの人が見ていたんですか？」

「千人以上いたんじゃないか？ 町の住民は全員避難していたというし」

「せん……にんっ!？」

一人や二人ならば、嘘を吐いている可能性があった。だが、千人となれば話は別だ。

「世の中には、説明がつかないこともある」

柏崎は、そう言って仕事を再開した。

「だが、説明をしたり解決したりしなくてはいけないこともある。我々も、不動産を管理している以上、そういうことを要求されているのさ」

柏崎の言葉には、やけに重みがあった。きっと彼女は、説明がつかないことの説明や解決を何度も求められているのだろう。

彼女の横顔を見つめながら、榊は九重の名刺をすがるように掴んでいたのであった。

5

榊が連絡をすると、九重は豊洲にいるということだった。

あまりにもタイミングが出来過ぎていて、榊は気味が悪くなってしまうが、気を取り直して九重と待ち合わせることにした。

九重が指定したのは、豊洲にある喫茶店だった。

「九重さん、お待たせしました!」

指定された喫茶店に到着した榊は、奥の席にいる九重の顔を見るなり、足早に歩み寄った。

「それほど待っていない。気にしなくていい」

九重はさらりとそう言ったが、彼が注文したココアはすっかり飲み干されていた。市ヶ谷駅いちがやから豊洲駅へは東京メトロ有楽町線一本だが、それなりに距離が遠いのだ。

「すみません、お仕事申中だったみたいで」

「いや、私用だ」

九重は榊に答えながらも、遠い目で、窓の外に見える豊洲の街を眺めていた。

通りには、人も車も絶え間なく行き交っている。ファミリーが和気あいあいとお喋りしゃべりをしている横で、スーツ姿の人達がせわしなく目的地に向かっていった。

「私用、ですか。まあ、どっちにしても、待ってもらって申し訳なかったっていうか……。九重さんは、事務所とか持ってないんですか？」

名刺には、メールアドレスと携帯電話の番号しか記されていないなかった。

「事務所はある。あまり、人を招ける場所ではないけどな」

「ほほう？」

榊は興味があったのだが、九重はそれっきり黙ってしまった。こちらが質問しない以上、彼は自身のことを語りたがらないらしい。

九重がなぜ、事務所に人を招きたがらないのか。

（片付いていないのかな。意外とずぼらだったりして。まあ、単純

に、僕みたいな素人に入って欲しくないのかもしれないけど）
なにせ目の前にいるこの男は、呪いの専門家だという。
榊自身、呪いを体験した身とはいえ、知識は素人の域を脱してい
ない。

「で、どんな要件だ」

「はっ、それなんですけど……！」

榊は慌てつつも、九重に事情を話す。九重は黙って相槌を打ちな
がら、榊の説明に耳を傾けていた。

「——というわけで、件のマンションで呪いが発生していないか、
九重さんに鑑定して欲しいんです。もし、呪いが発生していたよう
だったら除霊じよれいをお願いしたいんですけど……。勿論もちろん、料金は追加で
支払いますから」

「君達は、調査をしていないのか？」

九重は榊に問う。

当然の質問だ。怪しいと思われる部屋は空き部屋で、しかも、
マヨイガが鍵を持っているのだから。

「さすがに、立て続けに呪いに関する事件があったので、上司も慎
重になっていて……。上野うえのの件も、先に九重さんを案内していれば、
手間が省けたのではないかと言っていました」

貸店舗の一件は、榊と柏崎が異様な遺体を発見し、警察に通報し
た。だが、九重の手で、消失した遺体の一部を取り戻せた。

もし、警察と九重の順番が逆だとしたら、警察は行方不明の遺体の一部を探す手間は省け、九重と榊が警察の目を気にしながら捜査をすることはなかったのではないかということだった。

「鑑定にかかる費用よりも、手間を省く方を選ぶか。俺も随分ずいぶんと信頼されたものだな」

「大きな実績が二つありますしね。それに、うちの上司は現実主義者なので」

「そう名乗る者は、呪いを非現実的なものと認識することが多い」

「事実を事実として受け止める器があるってことですよ」

そう言い切った榊を、九重はしばらくの間、じっと見つめていた。

喫茶店に流れる穏やかなBGMと近くのテーブルの会話が、やけにハッキリと榊の耳に届く。

気まずさのあまり、榊の手が汗でべたべたになり始めた頃に、九重は「わかった」と頷いた。

「その依頼、引き受けよう」

「有り難がとう御座ございます！」

「俺が追っているものも、そこにあるかもしれない」

「九重さんが追っているものって……？」

そう言えば、九重と出会ったのは榊が住まうマンションの前だった。あの時、九重は既に、榊の部屋に目をつけていたように思える。

九重は、逡巡しゆんじゆんするように視線を彷徨さまよわせてから、ポツリと答え

る。

「一年前の事件の、痕跡だ」

「一年前っていうと、もしかして、綿津岬消失事件……？」

「そうだ。察しがいいな」

九重の目が細められる。

「豊洲の物件の話題の時に、上司と少し話しまして……。綿津岬っていう街が、丸まる一つ沈んじゃったんですよね……」

改めてインターネットで調べてみたが、公式のものとされている原因の他に、オカルトじみたものがいくつか上がっていた。

その中でも興味を引いたのは、綿津岬に祀まつられていた神の「一柱ひとばしら」が綿津岬の下で眠っていたという話だった。その説は、ある出版社が発行しているオカルト誌にも掲載されているとのことで、マニア達の間では非常に話題になったという。

普段ならば、荒唐無稽こうとうむけいだと一蹴いっしゅしているような話だが、綿津岬崩壊時に、巨大な異形が現れたという話と妙に一致していると思ったのだ。

その話をするると、九重は目だけ動かして周囲を一瞥いちべつし、声を少し潜ひそめた。

「あの場所には、異界の存在がいた」

「異界って、上野の貸店舗の時に入った空間ですよね……。その存在っていうことは……」

異界で見た異様な光景と、綿津岬が崩壊した時に異形が現れたという証言が榊の頭の中で重なる。

「俺が異界と呼んでいるのは、俺達が存在している物理的な世界と、認知による世界の境界だ。双方を阻むものが曖昧だから、普段は接触が困難な者同士が、ちよつとしたことをきっかけに触れ合つてしまうこともある」

「認知つて、呪いの原因にもなるやつですよ……」

「ああ。その世界にいる存在は恐らく、俺達よりも高次元の存在だ」

「高次元……？ 確かに、常識を超えているとは思いますが」

「我々は三次元に存在している。彼らはその、上位の次元にいるということだ」

一次元は線、二次元は平面、三次元は立体で存在し、自分達は立体であり空間を自由に行き来出来る三次元の存在だということは、榊も知っていた。

そして、四次元は時間を指しており、四次元の存在は時間を自由に行き来できるらしい。そのため、四次元の存在の移動は、我々から見ればタイムトラベラーのように映る。

概念や認知に依存している者達も、それに似たようなものなのだろう。

「彼らのような高次元の存在は、時として、我々の認知や感覚に働きかけて接触を図る。綿津岬の事例は、その類だろう」

「それじゃあ、その綿津岬の下から出た神様とやらの行方が分からないと、まずいのでは……」

「いや」

九重は頭を振った。

「記事によると、その存在は本来あるべき場所へと還れたとのことだった。その存在自体は問題ない。だが——」

「だが？」と榊はオウム返しに問う。

「呪いの残滓が残っている」

つんとした磯臭さが、鼻先を過ったような気がした。あらゆる生命が生まれて死ぬ場所である海においては、生き物を煮詰めたようだと榊は常日頃から思っていた。

「実際、俺は綿津岬の跡地で呪いの残滓が渦巻いているのを感知した」

放っておくわけにはいかないと思った九重は、それらの禊ぎを行うことにした。その甲斐あって、今はかなり落ち着いている。

「流石は九重さん。残滓で何かが起こる前に動いていたわけですね」

「いいや。俺が見つけた時にはすでに、ある程度薄まっていた。自己浄作用のせいだろう」

「放っておけば自然に薄れるっていうやつですか？ でも、完全になくなるには時間がかかりますし、九重さんが早急に対処してくれて良かったというか——」

「君は何か勘違いをしているようだな。自然と薄れたということは、呪いが分解されて拡散したということだ」

「あつ……」

榊は息を呑む。

いくら泥が入った水を薄めても、泥がなくなるわけではない。泥は薄くなったように見えるかもしれないが、飲料水には出来ない。

「もしかしたら、呪いは海の方へ……？」

「いや。呪いもまた、彼らと同じ次元に存在している。俺達の物理的法則とは異なる動き方をするんだ。俺は、そんな残滓を追っていた」

「追っていたってことは、まさか、その先に——」

榊の口の中は、いつの間にか渴いていた。

喉が張りつくような感覚が、榊を襲う。瞬きをすることすら忘れ、

双眸を見開いているせいで眼球がチリチリと痛かった。

「そうだ。その先に君がいた。正確には、君が借りている部屋があった」

綿津岬消失事件。巨大な異形。そして、残された呪いと、榊の部屋を襲った怪現象。

それらが、一つに繋がってしまった。

「呪いの残滓が、予め巡らされていた流れと合流して、そこに流れ込んでいたらしい。その流れに接触した点が、豊洲の辺りだった。

何度か場所を特定しようと足を運んだが、この辺りは歪み^{ゆが}がひどくて特定に至らなかつたんだ」

歪みのひどさは、その異界の存在がいたことによるものだった。榊のように、平均的な感受性の人間には影響を及ぼさないが、靈感が強いと言われている類^{たぐい}の人達にとって、息苦しさを訴えたくなるような環境らしい。

「そんな風には見えないのに……」

丁度、喫茶店に学生と思しき数人の男女が入って来たところだった。彼らはのん気に、大学のレポートが面倒くさいとか、サークルのメンバーで飲みたいとか、そんな話をしていた。

何処でも見かける、日常的な風景だ。とても、呪いによって歪んでいるようには見えない。

だが、榊は呪いが日常に潜んでいることも知っていた。ちょっとしたことが認知を歪め、呪いを発生させるというのも実感していた。「合流地点の呪いを解けば、これ以上呪いが拡がるのを防げる。あとは、既に拡がっている場所の呪いを解いていけばいいだけだ」

「なるほど……!」

それが本当ならば、榊達のように呪いに苛まれる者を減らすことが出来る。榊は、誰かが自分のように怖い想いをするのも、呪いが関わることで遺された人々が悲しむことも避けたかった。

「榊、案内してくれないか」

「勿論！　っていうか、弊社としては、土下座してでもどうにかして欲しいですし！」

「土下座はいらない」

淡々と断る九重の眼差しはいささか投げやりで、心底不要そうであつた。

「それはそうと、ふと気になったんですけど」

「なんだ？」

「九重さんって呪いを解くのを生業なりわいにしているけど、呪いが拵はがるのを事前に防ぎたがるんですね。九重さんは実力がある人みたいですし、言いかたは悪いですけど、呪いが拵はがっていた方が儲もうかるのでは……」

それを聞いた九重は、やや不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「見くびらないで欲しい」

「あつ、いえ、たとえ話ですってば。九重さんがそういう人には見えないですし。でも、商売的にいいのかなって」

「呪いで怖い想いをしたり、呪いが原因で遺された者を悲しませたりしたくないだけだ」

九重はきっぱりとそう言って、席を立つ。

そんな彼の大きな背中を見つめ、榊は自然と顔がほころぶのを感じた。

「確かに、そうですね！」

九重は、榊にない異能を持っているが、抱いている気持ちは同じなのだ。それを認識した榊は、置いて行かれないようにと九重の後を追ったのであった。

二人が向かう場所からは、運河が見えた。

東京湾と繋がっているため、潮風が漂ってくる。ときおり、小型の船も通り、穏やかな水面にさざ波を立てていた。

マンションに着くころには、空はすっかり曇っていた。

昼間だというのに暗く、陰鬱な気持ちになる。海が近いせいで、磯臭い湿気が身体中に張りついていて不快だった。

「ここ、なんですけど……」

榊は九重とともに、四〇二号室の前までやってきた。

マンションは数年前に建ったのだが、外に面した廊下はやけに薄汚れていて、古びているように見えた。

「潮風のせいで、劣化が早いですかね」

「そういう一面もあるだろうが、呪いはケガレを集めるからな」

九重は、ねめつけるような目つきで辺りを見回す。

「ケガレって、なんですか？」

「平たく言うと、負のエネルギーだ。君の家の周りにいた連中も、その一種だ」

榊の家の周りにいた連中とは、窓を叩いたり壁の向こうで話して

いたりした者のことだろう。

自らに降りかかった怪現象を思い出し、榊はぶるりと身体を震わせる。

「幽霊みたいなものでしょうか……」

「そう思ってもらって間違いではない」

九重はそう言うと、虚空こくうに視線を彷徨さまよわせてから、四〇二号室の扉を見やった。

「やはり、この先に呪いの流れがあるようだな」

「ひい、ビンゴ……」

鍵穴に鍵を突っ込みつつ、榊は震える。

「また……、あの板切れがあつたりするんでしょうかね」

「……そうかもしれないな」

九重と出会った場所には、必ずあの板切れがある。人型をした、呪いを巻き起こす呪具が。

「あれは一体、何のために置かれていたんでしょう？」

「それを調査しているところだ」

九重はそう返すもののおおよその予想はついているようだったが、確信には至っていないがゆえに、慎重になっている。そんなようにも見えた。

（九重さんは、慎重派なんだろうな）

見た目も少し神経質そうだし、と榊は納得しながら鍵を開ける。

その時だった。わずかに開いた扉の中から、ぬっと腕が伸びてきたのは。

「へ？」

抵抗する間もなく、物凄い力ものすごいで引き込まれる。

「榊！」

「九重さんっ！」

九重が手を伸ばすものの中に合わず、榊は虚空を掴み返したただけだった。

榊は吸い込まれるように四〇二号室に転がり込み、狭い玄関に身体を打ち付ける。扉はボタンと勢いよく閉まり、外界から隔絶かくぎされてしまった。

「いたた……」

よろよると起き上がると、つんとした磯の臭いがした。生き物も死体も煮詰めたような、懐かしくも不快な臭いであった。

室内は暗い。

榊は無意識のうちに、手探りでスイッチを探していた。壁伝いに探った先で見つけるものの、スイッチを入れても照明はつかない。

「ヒューズが落ちて……いや、空き家だし、電気がそもそも通っていないのか」

当然のように予想は出来たはずだ。相当、動揺しているのだろう。何とかドアノブを見つけて扉を開こうとするが、何故か、びくと

もしなかった。

「えっ？」

ガチャガチャとノブを捻るが、手ごたえがない。押しても引いても、扉は閉ざされたままだった。

「九重さん！」

櫛は鉄の扉を思いつ切り叩く。しかし、扉の向こうから反応がない。

おかしい。

そもそも、こんな異常事態が起きたなら、九重自ら、扉を開けたり叩いたりして櫛に呼びかけるだろう。

「もしかして、異界……？」

視界が少しずつ開ける。目が闇に慣れてきたからだ。

入居者がいないというのに、カーテンがきつちりと閉められていた。前の住民の残置物だろうか。

カーテンの隙間から、わずかに外界の光が漏れている。

その光を、床がぼんやりと反射していた。フローリングされた廊下の床が、濡れているのだ。

(磯臭さの正体は、あれか?)

海水と思しき水は、廊下に点々と続いていた。奥にある、洋室に向かって。

「お邪魔します……」

入居者は誰もいないはずだが、つい、断りを入れてしまう。奥から、心配を感じたからだ。

一体、何がいるのだろうか。

廃墟に浮浪者が住んでいるという話を聞いたことがあるが、ここは管理されたマンションの空き室だ。だが、前の入居者が合鍵を作っていて、退去後も出入りしているという可能性もゼロではなかった。

足音を忍ばせながら、奥の洋室までやってくる。六畳ほどの部屋で、カーテン以外の残置物は見つからない。

そして、海水のようなものが点々と落ちていただけで、何者かの姿もなかった。

「なんだ……。悪戯いたずらかな。誰かが海水が垂れるようなものを持ち込んだとか……」

榊は胸をなでおろす。

そんな榊の背後で、ひた、という濡れた音がした。

その音に、榊は冷静になる。そもそも、自分をこの部屋に引き込んだ存在がいるはずだ。それは、どこへ行ってしまったのか。

廊下の途中に、バスやトイレに通じる扉があった気がする。

そう思いながら、榊は恐る恐る振り返った。

「——っ！」

その先にあったものに、榊は声にならない悲鳴をあげる。

そこにいたのは、人ではなかった。

おおよそのシルエットは人の形で、成人男性ほどの大きさだ。しかし、ぬらりと濡れた肌と、頭の側面についたぎよろりとした眼球が、人とは異なる存在であることを物語っていた。

濡れた肌をよく見ると、細かい鱗うろこがびつしりと敷き詰められている。異様に長い指の間には、ぶよぶよとした膜が張られていた。そのせいで、手足というよりは鰭ひらのように見えた。

まるで、魚だ。

魚を無理矢理、人間のような形にしようとかねくりまわした悪趣味な代物のように思えた。

その異形は、目をぎよろぎよろさせながら、ひた、と櫛くしに歩み寄る。

櫛は異形から逃れようと後退するものの、足が震えているせいで、よろけてしまった。バランスを崩した櫛は、派手な音を立てて尻餅しりもちをつく。

だが、異形は無言で見下ろしながら、ゆっくりと近づいてくるのみであった。

「ひい……！！く、来るな……！！」

異形の手は、身動きが取れない櫛に向かって伸ばされる。吐く息はつんと磯臭く、臭気は異形そのものによるものだということがわかった。

自分はどうなってしまうのか。

異形の目からは、感情が全く読み取れない。自分とは明らかに異なる次元の生き物に見えた。

肉食獣に食べられるとか、爪で切り裂かれるとか、そういった単純な暴力に対する恐怖とはまた違った、得体の知れなさが柵を満たしていた。

異形の鰓えらが生々しく動く。開かれた口からは、ごぼっと海水が溢れた。

「あ……あー……」

ぽかんと開けられた口から、声のようなものが漏れる。

「うるさうるさいいいい……なんじだとおもっておもおもってるの
おおお……」

異形は無表情のまま、鰓を震わせて濁った声を吐き出した。

「なっ、どうい……」

「どうい……どうい……くるなくなるな」

この異形は、こちらが言っていることを繰り返しているだけだと悟る。先ほどの声も、近隣住民から壁や床越しに投げられた声なのだろう。

「おじやま、じやまじやまじやま……いたいたいたずら、いたずら……」

ずいっと異形の顔が迫る。吐いた息は生臭く、海の中に放り込ま

れたように息苦しくなった。

「助けて——」

濡れた指先が、榊の額に触れようとする。

だが、その指先は、ぴたりと止められた。

「なっ……」

異形の胸から、手が生えていたのだ。黒い革手袋をした、見覚えのある男の手が。

「——急急如律令。我が呪いにより、ほせ解けよ」

九重の澄すんだ声とともに、異形の身体が風船のように膨ふくらんだかと思うと、一瞬にして弾け飛んだ。榊は海水を浴び、磯の臭いが辺りに撒き散らされる。

その瞬間、一気に視界が明るくなった。

窓から陽光が差し込み、がらんとした室内をくまなく照らしている。カーテンレールには、何もかかっていなかった。

「えっ、どういう……こと……ですか？」

散らばったと思しき海水も見当たらない。

榊の目の前には、人型の板切れを驚わしづか掴みにしている九重の姿があった。そして足元には、魚が横たわっている。

やけに太った魚で、顎あごが外れんばかりに口を大きくあけながら、喘あえぐように鰓を動かしていた。

だが、みるみるうちにその動きが緩慢なものになり、やがて、ピ

クリとも動かなくなった。

「そいつが、この呪具を呑み込んでいた。そのせいで、異界の存在になって歪みを発生させていたんだろうな」

「さつき僕がいたのは、異界ってことですか……？」

「恐らく。君が潜り込んでからすぐに境界を渡ったら、この呪具の気配を強く感じた。そこで、急いで呪具を破壊したということだ」

九重の手の中で、呪具は風化したように粉々になる。欠片がばらばらと、死んだ魚の上に落ちた。

「すぐに……？ 僕には、数分に感じたんですが……」

「異界と現実世界では、時間の進み方が違うようだな」

九重は、最良の対処をしてくれていた。

だが、その間、榊が異形に害される機会はいくらでもあった。専門家の九重がいても、油断はできないということか。

それよりも、聞き逃せないことを九重が口にしたのに気づいた。

「いや、待ってください。僕が潜り込んだって……」

「君は自らこの部屋の鍵を開け、俺が止めるのを待たずに突入したんだ」

「僕が、自分で入った……？」

「いや、違う。腕が伸びて来て、引きずり込まれたはずだ。」

だが、榊は思い出そうとすればするほど、その記憶が曖昧であることに気づいた。その腕はどんな腕だったのかわからないし、部屋

の中に導かれるような感覚だったような気もする。

「……呪いは、人の認知を歪ませる。特にこの場所は、大きな歪みを発生させていたようだな」

榊の動揺を察した九重は、窓を開けて全開にした。

ふわっと入り込んだ潮風が、室内の磯臭さを拭い去っていく。曇っていた空もだいぶ晴れていて、陽光が眩しかった。

榊は思わず、九重のコートにすがりついた。何かを抛り所にしていなければ、自分が壊れてしまいそうだった。

九重はそれを拒むことなく、黙って榊のそばにいた。

床に転がっていた魚の死体は、いつの間にか、干からびて骨だけになっていたのであった。

日が傾きかけた頃、ようやく榊は落ち着きを取り戻した。

九重は魚の死体を埋葬し、榊は九重に頼まれた調べ物をこなす。

「九重さん、やっぱり、綿津岬から引越してきた人が、このマンションにいたようです」

会社に確認をしたところ、綿津岬三丁目に住んでいたという人物が、四〇二号室にいたのだという。だが、その人物は数カ月前に、勤務先の都合で引越してしまったそうだ。

異音が聞こえるという苦情は、その後に発生したとのことだった。

「あの部屋は、綿津岬と縁が繋がっていたということか」

「そうみたいです。入居者さんが入ったのは二年前で、あの街の崩壊とは関係なかったみたいですけど」

あの街はなんだか気味が悪い、と入居者はぼやいていたという。綿津岬を取り巻く異様な環境に勘付いて、引越したのかもしれない。

「綿津岬に、君達の会社が管理していた物件は？」

「いくつかありました。僕はその頃いなかったんですけど、上司がかなり対応に追われて大変だったって聞いてます」

「ならば、そこにあつた可能性が高いな」

九重は、自らの手のひらを見つめる。先ほど、呪具を掴んでいた方の手だ。

「あの人型の呪具、ですか？」

「ああ。物件もろとも運河に沈み、それを魚が食らった可能性がある」

榊の目の前で横たわっていた魚は、確かに大きかった。おおよその形状はブラックバスと酷似していたものの、あまりにも身にしまりがなかったが。

「呪具を食べたから、魚とも人間とも言い難い異形になったっていう……」

「異界に干渉出来る力を取り込んで、歪んだ存在になったということだな。そうなると、概念的な流れを認識して、それを辿るように

なる」

「それが、綿津岬と繋がっていた人の縁……ですかね」

「ああ。その魚も恐らく、綿津岬の周辺をめぐらにしていたのだろう。だから、綿津岬の縁を辿るきっかけになったんだ」

縁を辿った異界の存在は、縁が残っている場所へと住み着いた。

その存在が周囲の認知を歪ませて、異音のトラブルへと繋がっていたのだ。

「それじゃあ、異音の方は解決したってことですかね……」

「ああ、恐らくな。万が一、まだ何かあるようならば教えてくれ。

それは、追加報酬無しで処理する」

「アフターケアがちゃんとしている……。超優良業者じゃないですか……」

「欲しいのは、報酬よりも信頼だからな」

九重はさらりとそう言って、マンションを見上げた。

「それにしても、同じタイプの呪具は三つめ——か」

「どうしてうちの物件にあんなものが……」

「……さあな。だが、何らかの意図を感じる。場所に法則性があるかもしれないな」

池袋、上野、そして、豊洲の隣町であった綿津岬。

神は脳内で広げた地図にマーキングをするが、法則性は明らかにならなかった。

「呪具を置いた意図はわからないんですけど、なんだか、呪具が願いを叶えようとしているように思えるんですね」

「願いを？」

九重は眉間に皺しわを寄せ、怪訝けげんな顔をしてみせる。榊はその様子に怯えつつも、しどろもどろになりながらも話した。

「素人の考えることなんで受け流して欲しいんですけど、僕の家にあつたやつは、あの家に留まりたいと思っていた僕の認知を歪めて、惨状さんじょうから目を背けさせてあの家に入れられるようにしてくれていたし、上野の貸店舗にあつたやつは、生活が困窮こんきゆうする家族に保険金が行くようにしつつも、店長が異界で店を続けられるようにしていたし……。すごく歪んだやり方なんですけど、何らかの形で、呪具がある物件の借主の願いを叶えようとしているような気がして」

「……そういう考え方もあるか。このマンションでは借主がいらないから、あのような形になったが……」

とはいえ、呪具を呑んだ魚は、魚の身でありながらも陸上で生活ができるようになっていた。

魚がそれを望んだかはわからないが、そのお陰で、陸上に繋がった縁を辿っていた。

「それについては、まだ検証が必要だな。だが、今回の一件で、綿津岬との接点を得られたのは大きい。綿津岬というよりは、綿津岬に出現した巨大な異界の存在との接点といった方が相応しいかもし

れないが」

「魚が呪具を食べたというのも、そもそもは、巨大な異界の存在が綿津岬を沈ませたのがきっかけですしね……」

榊は、ほんのりと土が盛られた花壇を見やる。

マンションの敷地内にある装飾の一部を借りて埋葬まいぞうしてしまったが、そのまま可燃物としてゴミ処理するのは、あまりにも忍びなかったのだ。

「まだ、推測の域を出ないが」

「はい？」

「マヨイガの物件に予め呪具が設置されて、何らかの儀式の準備を整えていたのかもしれないだろう。そこに、綿津岬の呪いが流れ込んで、呪具の効果が強くなった可能性もある」

九重の分析に、榊は息を呑む。

背中から、どっと汗が噴き出すのがわかった。

「儀式って……なんの……」

「そこまでは、わからない」

「やっぱり、弊社が管理している物件に、まだまだあの呪具が……」

「あるかもしれないな」

九重はあっさりと肯定する。榊は、意識を手放しそうになった。

「榊」

「ひゃい……」

名前を呼ばれた榊は、力のない返事をする。

「他にも怪異が報告された時は、躊躇ためらわずに俺を呼んで欲しい。これは、君達のような素人にどうにか出来るものではないからな」

「そりゃあもう、迷わず全力で呼びますって……」

呪いは恐ろしい。

今回の一件で、それが身に染みていた。まさか、件の部屋に引き込まれたのではなく、自ら進んで入っていたなんて。

一歩間違えば、どうなっていたか分からない。二度と、戻って来れなかったかもしれない。

榊はぶると震え、再び九重のコートをしっかりと掴む。九重は髪を海風に躍おどらせつつ、榊が落ち着くまで、黙ってその場にたたずんでいてくれたのであった。

(つづく)